定林寺の板碑修繕
調査を通じて深まった歴史

約550年の歴史を持つ玉叟山定林寺（岡芹）の県指定文化財工芸品「板碑」の修繕作業が行われ、これまでの歴史的解釈への裏付けとなる発見が多数ありました。今回は定林寺の大山定隆住職に、これまでの調査で分かったことと、これからへの期待について取材しました。

修繕作業で甦る姿

この板碑は緑泥片岩製の武蔵型板碑であり、法量は、高さ155㎝、幅45㎝、厚さ5㎝を呈します。板碑の大きさや厚み、断面形状、山尊の種子の彫り方などから、約700年前に製作されたと推察されています。昭和38年に川島地区の羽田さんから寄進があり、翌年に県指定文化財に登録されました。

令和6年10月29日から12月6日に奈良県の公益財団法人元興寺文化財研究所によって洗浄作業が行われました。「洗浄作業によって、緑泥片岩の鮮やかな緑色が戻り、板碑が建立された約700年前の姿を感じることができました」と住職は笑顔で振り返ります。その後、撥水加工、補強などが行われ、3D計測による科学的なアプローチでの研究も始まりました。

修繕作業前の板碑

修繕された板碑と大山住職

3D計測時の様子

新知見への一歩

修繕作業の結果、板碑には大日如来、釈迦如来、阿弥陀如来を表す梵字が刻まれ、その上には天蓋、下には蓮華座が再確認されました。これにより「特に釈迦如来の梵字の存在から、約700年前のものである可能性が深まりました」と住職が教えてくれました。

さらに興味深い発見もあったそうで、梵字の下部に判読不明の銘文の存在が確認されました。これらの銘文が解読されれば、板碑建立の目的や背景が明らかになる可能性があります。また、供養文が書いてあれば供養塔の機能を考察できます。

「貴重な歴史が明らかになっていくことは非常に興味深いです。これからの新しい発見が楽しみです」と住職は笑顔で語ってくれました。

取材を終えて

文化財は市の歴史を学ぶ上で重要な要素であるからこそ、大切に保存し後世に繋いでいくことが求められます。長い年月を越えて私たちに発見をくれる定林寺の板碑は、市民の誇りとしてこれからも地域の歴史を伝え続けていくのだと感じました。

3D計測した板碑

和田 恵子 さん（榎生一丁目）

素晴らしい文化財が身近にあることのありがたさ、守り伝えていくことの大切さを再確認しました

市の歴史を学ぶみなさん